

## 「現代文要約の方法」テキスト

Q、イントロダクションに代えて

現代文の試験では要約の能力が問われる。要約問題は当然のこととして、記述式であれ、選択式であれ、解答の表現は簡潔なものであるからだ。また、接続語の補充や語句の補充といった穴埋めの問題においても、本文の内容を簡潔に把握しなければならぬ点において、要約は必要と言えるからだ。では、要約とは何なのか。様々な辞書を見るとおおよそ「文章の要点を短くまとめること」となる。では、「要点」とは何なのか。「要点」があるからには、「要点以外」のものもあるのか。つまり、優先順位はあるのか。「短く」ということは元の文章は冗長なのか。「まとめる」とはどのようなことか。このカリキュラムではこれらの問いに一つの答えを提示する。

### 一、このテキスト「要約」の意味

全体のテーマについて重複なしに短くまとめること。

←  
「テーマ」とは？ 「重複なしに」ことは？  
「短く」とは？ 「まとめる」とは？

二、「テーマ」とは何なのか。――まとめる役としてのテーマー

←  
「テーマ」とは、文章のある部分において、「何の話か」という問いの答えになるもの。

←  
部分のテーマと全体のテーマがある。

【例1】全体が分かれば部分が分かる。

新聞の方が雑誌よりよい。  
海岸の方が道路よりよい場所である。  
最初は歩くより走るほうがよい。  
何度も試みる必要があるかもしれない。

ある程度の技術はあるが、できるようにするのは簡単だ。

小さい子供でも楽しめる。  
一度うまくいったら困難はほとんどない。  
鳥が近づきすぎることほめたにない。  
しかし雨には濡れやすい。

皆が同じことをすると問題が起こる。  
かなりスペースが必要である。  
障害がなければ、非常にのどかである。  
石はアンカーの代わりになる。

いったん切り離されてしまうと、二度目のチャンスはない。

(Bransford, J. D., & Johnson, M. K (1972). Contextual prerequisites for understanding)

【例2】テーマ・関心による取捨選択  
花が — 綺麗だ。

【例3】テーマの見出し方①—連続して顕在・潜在している語—  
信号は守りましょう。  
赤は止まれ。  
黄は注意。  
青は進め。

【例4】テーマの見出し方②  
「これから現代文の要約の方法について話しましょう。」《テーマ設定》  
「どうすれば現代文の要約ができるようになるのだろうか。」《問題提起》

【例5】テーマの見出し方③  
結論からテーマを見出す。三、結論とは何か」にて説明。

三、「結論」とは何か。—最もまとまりのある主張—

結論とは、「最終的に」主張されていること。

【例6】  
①山路を登りながら、こう考えた。②智に働けば角が立つ。③情に棹させば流される。④意地を通せば窮屈だ。⑤とかくに人の世は住みにくい。⑥住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。⑦どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。⑧人の世を作ったものは神でも

なければ鬼でもない。⑨やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。⑩ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。⑪あれば人でなしの国へ行くばかりだ。⑫人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。⑬越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、くつろげて、東の間の命を、東の間でも住みよくせねばならぬ。⑭ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命がくだる。⑮あらゆる芸術の士は人の世をのどかにし、人の心を豊かにするが故に尊つとい。

〔夏目漱石『草枕』冒頭〕

最終的とは……

AだからBだから……Yだから、最終的にZ！

#### 四、「重複なし」とは？

重複なしとは、同じことが書かれていないようにすること。

主張は、同じ言葉を繰り返したり、具体例・経験をあげて説明しやすくしたり、文章の冒頭と末尾に言って繰り返したりする。このようなものを重複といい、要約では重複しているものを二つにしばる作業をする。反対に、今まで述べられた内容と違うことが出現したら要素として拾い上げる。

#### 五、「短く」とは？

短くとは、文章中の表現をより字数の少ない表現に書き換えること。

#### 六、「結論の筋道」とは？

結論に対して、筋道の通るように理由を組み立てていくこと。

←具体的には

Zから遡って理由を探していく。

Z↓Y↓X↓……

#### 七、「再び」「要約」とは？

文章全体において「何の話か」という問いに対する答えについて、同じことが書かれていないように、文章中の表現をより字数の少ない表現に書き換え、最終的に主張されていることを筋道の通るように理由をつけ組み立てていくこと。

## 八、演習

【文章1】 100字以内で要約せよ。

「1」料理屋の料理にせよ、あるいは家庭の料理にせよ、それがうまくできるもできないも、要するに料理をする人の舌次第なのである。

「2」あそここの料理屋の料理よりも、ここうちの奥さんのお手料理の方がはるかに美味である、と言うようなことも時に聞く話である。この場合、この奥さんの味覚は、他の料理屋の料理人のそれよりも確かに味覚感度が高く、且つ、しっかりしていたということを意味する。

「3」ところで、味覚器官そのものである舌は、人それぞれ一枚ずつしか持ち合わせていない。それゆえ、感度の高い舌を持ち合わせているということは、天幸であり、天爵であり、天恵である。

「4」しかし、天分的に味覚のすぐれた人というのは、そうザラにいるというわけにはいかない。天は地上に、この味覚の人を産みつけるべく、常に甚だケチであるとも言えようか。もちろん、私の狭

い経験の範囲から言うのであるが、私の知っている数 あまた 多の料理人のうちに、この天与の特質を備えている人が、果して幾人あるであろうか。曰く新竈すしの主人、曰く丸梅の女将、曰く誰、曰く誰と言ってみたところで、一度に十人とは数えきれないかも知れない。それよりも却って、その道の人でない人で、料理好きの奥さんとか、女中さんとか、または案外世間に知られていない食道楽家の間に、立派な舌の持ち主を見受けることがある。

「5」孔子は「人飲食せざるは莫し、な能く味を知るもの よ鮮 すくなきなり」と言っているが、確かに、その通りだと思つのである。

「6」よく人の話に、このごろ東京の〇〇の料理は、さっぱり美味くなくなったとか、京都の〇〇の料理は、すっかり落ちてしまったとか言うのを聞くのであるが、これは話としては決して行き届いたものではない。否、ずいぶん無理な話である。料理もまた人間に許された一種の個人的な創作である。決してその家だとか、その看板だとか、またはその帳場とかで、勝手にどうともすることの出来る仕事でなければ、また商売でもないのである。いつの間にか、その作者が替ってしまっている以上、その作品の変るのは当然である。

「7」創作は、その人とともに二代をかぎる。東京の〇〇、京都の〇〇を始めた人などは、いずれもあれだけの名を残したほどの人であるのだから、必ず稀有の天才家であったにちがいない。その上にも、これらの人は、茶道において、確かにその精神を掴むことができ、それをまた具へよく、その料理道の上に移すことが甚だ可能だったのである。そして、この料理道の第一義——味覚への徹底とその整頓——とは、それが性格的に創作である関係から、これが第三者への伝授を決して完全ならしめないのである。

「8」そこで、私は重ねがさね、料理も一種の創作であって、その作者が替れば、その作品も変るということを銘記したのである。

（北大路魯山人「料理も創作である」）

【文章2】200字以内で要約せよ。

「1」近來、食べ物のことがいろいろの方面から注意され、食べ物に関する論議がさかんになってきた。殊に栄養学というような方面から、食べ物の配合や量のことをやかましくいうことが流行<sup>はや</sup>った。けれども、子供や病人ならともかく、自分の意志で、自分の好きなものを食うことのできる一般人にとっては、そういう論議はいくらやつても、なんの役にもたない。

「2」だから栄養料理という言葉が、まずい料理の代名詞のように使われたのも、むしろ当然である。わたしどもの目からみると、栄養料理というものは、料理にもなっていない。

「3」人間の食べ物は、馬や牛の食物とはちがう。人間は食べ物を料理して食うからである。料理とはいってもなく、物をうまく食うための仕事である。だが、わたしはなにもここまで改まって料理の講釈をしようとは思わない。ただ一ついつておきたいことは、ともかく、そういうようなことから医者とか料理の専門家といういろいろな物識りが、料理についてさかんに論議しているが、その一人として料理と食器についてはっきりした見解を述べているものがないということだ。

「4」いうまでもなく、食器なくして料理は成立しない。太古は食べ物を <sup>かしわ</sup> 柏の葉に載せて食ったということであるが、すでに柏の葉に載せたことが食器の必要を如実に物語っている。早い話がカレーライスという料理を新聞紙の上に載せて出されたら、おそらく誰も食おうとするものはない。それはなぜであるか、いうまでもなく、新聞紙の上に載せられたカレーライスがいかに醜悪なものに思われ、嫌らしい連想などが浮かぶからである。カレーライスそのものだけなら、これをきれいな皿に盛ろうと、新聞紙の上に載せようとも変わらないはずである。それ

かかわ  
にも 拘らず、美しい皿に盛ったカレーライス、これを喜んで食べ、新聞紙に載せられた

カレーライスは見るだに悪寒を覚えて、眉まゆをひそめるのは、料理において食器がいかに重要な役目をするかを物語つてあまりあるといえるであらう。

「5」しかして、こういう感覚は一応は誰でも持っているのだが、美食家とか食通とかいうものになればなるほど、それが鋭くなる。ほんとうに物の味が分つてくればくるほど料理にやかましくなり、料理にやかましくなればなるほど、料理を盛るについてもやかましくなる。これはまた当然である。

「6」しかるに、現代多くの専門家が料理をうんぬん云々していながら、その食器について顧みるところがないのは、彼らが料理について見識がないか、ほんとうに料理というものが分つていないか、そのいずれかであらう。

「7」以上のことが分ると、それに従つて次々にいろいろなことが分つてくる。料理をするもの立場からいえば、自分の料理はこういう食器に盛りたいとか、こういう食器を使う場合には、料理をこういうふうにせねばならぬとか、いわば、器を含めて全体としての料理を考えるから見識が広く高くなつてくる。

「8」また、もつと別な方面から考えてみると、よい食器のある時代は、よい料理のあつた時代、料理の進んでいた時代であるということが出来る。その意味では、現代は料理の進んだ時代ではない。よい食器が生まれていないからである。

「9」中国料理は世界一だというようなことをよく半可通のひとがいつている。また、なにも知らぬひとほだいたいそれを信用して、なるほど、そつだらうぐらいに考えている。けれど、わたしの見解をもつてすれば、中国料理が真に世界一を誇り得たのは明代であつて、今日でないというのは、これも中国の食器をみると分る。中国において食器が芸術的に最も発達したのは古染付にしても、赤絵にしても明代であつて、清になると、すでに素質が低落している。現代に至つては論外である。むべなるかな、今日私たちが中国の料理を味わつて感心するものはほとんどない。

「10」さらに食器をみると、その料理の内容まではほ推察がつく。中国食器のけんらん 絢爛たる色彩と外観の偉容と、西洋食器の白色一点ばりの清浄主義と、日本食器の内容的な雅味とは、それぞれの料理の特徴を示すばかりでなく、お国ぶりまでも窺わせてくれる。

「11」このように、いかなる方面からみても、料理と食器とは相離れることのできない、いわば夫婦のごとき密接な関係がある。料理を舌の先に感ずる味だけとみるのは、まだ本当の料理が分らないからである。うまく物を食おうとすれば、料理に伴つて、それに連れ添う食器を選ばねばならぬ。もちろん、ひいては料理は食う座敷も、床の間の飾りもすべてがこれに伴つてくるが、そのもつとも密接なる食器について意を用いることが、まず、今日の料理家に望まねばならぬ第一項であらう。

(北大路魯山人「料理と食器」)

【文章3】次の文章を読んで要約せよ。(注：坂口安吾「日本文化私観」の冒頭部分である。)

[1] ①僕は日本の古代文化について殆んど知識を持っていない。②ブルーノ・タウトが絶讃する桂離宮も見たことがなく、玉泉も大雅堂も竹田も鉄斎も知らないのである。③いわんや、秦蔵六だの竹源齋師など名前すら聞いたことがなく、第一、めったに旅行することがないので、祖国のあの町この村も、風俗も、山河も知らないのだ。④タウトによれば日本に於ける最も俗悪な都市だという新潟市に僕は生れ、彼の蔑み嫌うところの上野から銀座への街、ネオン・サインを僕は愛す。⑤茶の湯の方式など全然知らない代りには、猥りに酔い痴れることをのみ知り、孤独の家居にいて、床の間などというものに一顧を与えたこともない。

[2] ①けれども、そのような僕の生活が、祖国の光輝ある古代文化の伝統を見失ったという理由で、貧困なものだとは考えていない。②(然し、ほかの理由で、貧困だという内省には悩まされていくのだが――)

[3] ①タウトはある日、竹田の愛好家というさる日本の富豪の招待を受けた。②客は十名余りであった。③主人は女中の手をかりず、自分で倉庫と座敷の間を往復し、一幅ずつの掛物を持参して床の間へ吊し一同に披露して、又、別の掛物をとりに行く、名画が一同を楽しませることを自分の喜びとしているのである。④終つて、座を変え、茶の湯と、礼儀正しい食膳を供したという。⑤こういう生活が「古代文化の伝統を見失わない」ために、内面的に豊富な生活だと言うに至っては内面なるものの目安が余り安直で滅茶苦茶な話だけれども、然し、無論、文化の伝統を見失った僕の方が(そのために)豊富である筈もない。

[4] ①いつかコクトオが、日本へ来たとき、日本人がどうして和服を着ないのだろうと言って、日本が母国の伝統を忘れ、欧米化に汲々たる有様を嘆いたのであった。②成程、フランスという国は不思議な国である。③戦争が始ると、先ずまっさきに避難したのはルーヴル博物館の陳列品と金塊で、パリの保存のために祖国の運命を換えてしまった。④彼等は伝統の遺産を受継いできたが、祖国の伝統を生むべきものが、又、彼等自身に外ならぬことを全然知らないようである。

[5] ①伝統とは何か?②国民性とは何か?③日本人には必然の性格があつて、どうしても和服を發明し、それを着なければならぬような決定的な素因があるのだろうか。

[6] ①講談を読むと、我々の祖先は甚だ復讐心が強く、乞食となり、草の根を分けて仇を探し廻っている。②そのサムライが終つてからまだ七八十年しか経たないのに、これはもう、我々にとつては夢の中の物語である。③今日の日本人は、凡そ、あらゆる国民の中で、恐らく最も憎悪心の少ない国民の一つである。④僕がまだ学生時代の話であるが、アテネ・フランセでロベール先生の歓迎会があり、テーブルには名札が置かれ席が定まつていて、どういふわけだか僕だけ外国人の間にはさまれ、真正面はコット先生であつた。⑤コット先生は菜食主義者だから、たった一人献立が別で、オートミルのようなものばかり食っている。⑥僕は相手がなくて退屈だから、先生の食欲ばかりもつぱら観察していたが、猛烈な速力で、一度匙をとりあげると口と皿の間を快速力で往復させ食へ終るまで下へ置かず、僕が肉を一きれ食ううちに、オートミルを一皿すすり込んでしまう。⑦先生が胃弱になるのはもつともだと思つた。⑧テーブルスピーチが始つた。⑨コット先生が立上つた。⑩と、先生の声は沈痛なもので、突然、クレマンソーの追悼演説を始めたのである。⑪クレマンソーは前大戦のフランスの首相、虎とよばれた決闘好きの政治家だが、丁度その日の新聞に彼の死去が報ぜられたのであつた。⑫コット先生はボルテール流のニヒリストで、無神論者であつた。⑬エレジヤの詩を最も

愛し、好んでホルテールのエピグラムを学生に教え、又、自ら好んで誦む。⑭だから先生が人の死について思想を通したものでない直接の感傷で語ろうなどとは、僕は夢にも思わなかった。⑮僕は先生の演説が冗談だと思った。⑯今に一度にひっくり返すユーモアが用意されているのだろうと考えたのだ。⑰けれども先生の演説は、沈痛から悲痛になり、もはや冗談ではないことがハッキリ分つたのである。⑱あんまり思いもよらないことだったので、僕は呆気にとられ、思わず、笑いだしてしまった。⑲—その時の先生の眼を僕は生涯忘れることができない。⑳先生は、殺しても尚あきたりぬ血に飢えた憎悪を凝らして、僕をにらんだのだ。

「7」①このような眼は日本人には無いのである。②僕は一度もこのような眼を日本人に見たことはなかった。③その後も特に意識して注意したが、一度も出会ったことがない。④つまり、このような憎悪が、日本人には無いのである。⑤『三国志』に於ける憎悪、『チャタレイ夫人の恋人』に於ける憎悪、血に飢え、八ツ裂にしても尚あき足りぬという憎しみは日本人には殆んどない。⑥昨日の敵は今日の友という甘さが、むしろ日本人に共有の感情だ。⑦およそ仇討にふさわしくない自分達であることを、恐らく多くの日本人が痛感しているに相違ない。⑧長年月にわたって徹底的に憎み通すことすら不可能にちかく、せいぜい「食いつきそうな」眼付ぐらいが限界なのである。

「8」①伝統とか、国民性とよばれるものにも、時として、このような欺瞞が隠されている。②凡そ自分の性情にうらはらな習慣や伝統を、あたかも生来の希願のように背負わなければならないのである。③だから、昔日本に行われていたことが、昔行われていたために、日本本来のものだということとは成立たない。④外国に於て行われ、日本には行われていなかった習慣が、実は日本人に最もふさわしいことも有り得るし、日本に於て行われて、外国には行われなかった習慣が、実は外国人にふさわしいことも有り得るのだ。⑤模倣ではなく、発見だ。⑥ゲーテがシェクスピアの作品に暗示を受けて自分の傑作を書きあげたように、個性を尊重する芸術に於てすら、模倣から発見への過程は最もしばしば行われる。⑦インスピレーションは、多く模倣の精神から出発して、発見によって結実する。

「9」①キモノとは何ぞや？ ②洋服との交流が千年ばかり遅かったただだ。③そうして、限られた手法以外に、新たな発明を暗示する別の手法が与えられなかっただけである。④日本人の貧弱な体軀が特にキモノを生み出したのではない。⑤日本人にはキモノのみが美しいわけでもない。⑥外国の恰幅のよい男達の和服姿が、我々よりも立派に見えるに極まっている。

「10」①小学生の頃、万代橋という信濃川の河口にかかっている木橋がとりこわされて、川幅を半分に埋めたて鉄橋にするというので、長い期間、悲しい思いをしたことがあった。②日本一の木橋がなくなり、川幅が狭くなって、自分の誇りがなくなることが、身を切られる切なさであったのだ。③その不思議な悲しみ方が今では夢のような思い出だ。④このような悲しみ方は、成人するにつれ、又、その物との交渉が成人につれて深まりながら、かえって薄れる一方であった。⑤そうして、今では、木橋が鉄橋に代り、川幅の狭められたことが、悲しくないばかりか、極めて当然だと考える。⑥然し、このような変化は、僕のみではないだろう。⑦多くの日本人は、故郷の古い姿が破壊されて、欧米風な建物が出現するたびに、悲しみよりも、むしろ喜びを感じる。⑧新しい交通機関も必要だし、エレベーターも必要だ。⑨伝統の美たの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要なのである。⑩京都の寺や奈良の仏像が全滅しても困らないが、電車が動かなくては困るのだ。⑪我々に大切なのは「生活の必要」だけで、古代文化が全滅しても、生活は亡びず、生活自体が亡びない限り、我々の独自性は健康なのである。⑫なぜなら、我々自体の必要と、必要に応じた欲求を失わない



からである。

「11」①タウトが東京で講演の時、聴衆の八九割は学生で、あとの一二割が建築家であったそうだ。②東京のあらゆる建築専門家に案内状を送って、尚そのような結果であった。③ヨーロッパでは決してこのようなことは有り得ないそうだ。④常に八九割が建築家で、一二割が都市の文化に関心を持つ市長とか町長という名誉職の人々であり、学生などの割りこむ余地はない筈だ、と言うのである。

「12」①僕は建築界のことに就ては不案内だが、例を文学にとつて考えても、たとえばアンドレ・ジツドの講演が東京で行われたにしても、小説家の九割ぐらひは聴きに行きはしないだろう。②そうして、矢張り、聴衆の八九割は学生で、おまけに、学生の三割ぐらひは、女学生かも知れないのだ。③僕が仏教科の生徒の頃、フランスだのイギリスの仏教学者の講演会に行つてみると、坊主だらけの日本のくせに、聴衆の全部が学生だった。④尤も坊主の卵なのだろう。

「13」①日本の文化人が怠慢なのかも知れないが、西洋の文化人が「社会的に」勤勉なせいでもあるのだろう。②社会的に勤勉なのは必ずしも勤勉ではなく、社会的に怠慢なのは必ずしも怠慢ではな

い。勤勉、怠慢はとにかくとして、日本の文化人はまったく困った代物だ。③桂離宮も見たことがなく、竹田も玉泉も鉄斎も知らず、茶の湯も知らない。④小堀遠州など言えば、建築家だか、造庭家だか、大名だか、茶人だか、もしかすると忍術使いの家元じゃなかったかね、などと言う奴がある。⑤故郷の古い建築を叩き毀して、出来損いの洋式バラックをたてて、得々としている。⑥

そのくせ、タウトの講演も、アンドレ・ジツドの講演も聴きに行きはしないのである。⑦そうして、ネオン・サインの陰を酔つ払つてよろめきまわり、電髪嬢を肴にしてインチキ・ウイスキーを啣あおっている。呆れ果てた奴等である。

「14」①日本本来の伝統に認識も持たないばかりか、その欧米の猿真似に至つては、体たいをなまげず、

美の片鱗へんりんをとどめず、全然インチキそのものである。②ゲーリー・クーパーは満員客止めの盛況だが、梅若万三郎は数える程しか客が来ない。③かかる文化人というものは、貧困そのものではないか。

「15」①然しながら、タウトが日本を発見し、その伝統の美を発見したことと、我々が日本の伝統を見失いながら、しかも現に日本人であることとの間には、タウトが全然思いもよらぬ距へだたりがあった。②即ち、タウトは日本を発見しなければならなかったが、我々は日本を発見するまでもなく、現に日本人なのだ。③我々は古代文化を見失っているかも知れぬが、日本を見失う筈はない。④日本精神とは何ぞや、そういうことを我々自身が論じる必要はないのである。⑤説明づけられた精神から日本が生れる筈もなく、又、日本精神というものが説明づけられる筈もない。⑥日本人の生活が健康

でありさえすれば、日本そのものが健康だ。⑦彎曲わんきょくした短い足にズボンをはき、洋服をきて、

チヨコチヨコ歩き、ダンスを踊り、畳をすてて、安物の椅子テーブルにふんぞり返って気取っている。  
⑧それが欧米人の眼から見て滑稽千万であることと、我々自身がその便利に満足していることの間には、全然つながりが無いのである。⑨彼等が我々を憐れみ笑う立場と、我々が生活しつつある立場には、根底的に相違がある。⑩我々の生活が正当な要求にもとづく限りは、彼等の憫笑が甚だ浅薄でしかないのである。⑪彎曲した短い足にズボンをはいてチヨコチヨコ歩くのが滑稽だから笑うというのは無理がないが、我々がそういう所にこだわりを持たず、もう少し高い所に目的を置いていたとしたら、笑う方が必ずしも利巧の筈はないではないか。

「16」①僕は先刻白状に及んだ通り、桂離宮も見たことがなく、雪舟も雪村も竹田も大雅堂も玉泉も鉄斎も知らず、狩野派も運慶も知らない。②けれども、僕自身の「日本文化私観」を語ってみようと思うのだ。③祖国の伝統を全然知らず、ネオン・サインとジャズぐらいしか知らない奴が、日本文化を語るとは不思議なことかも知れないが、すくなくとも、僕は日本を「発見」する必要だけはなかったのだ。

(坂口安吾「日本文化私観」)

### 【文章1】

料理の出来は料理人の舌次第であり、優れた舌をもっている者は少ない。舌は天恵であるから、第二者への伝授は不可能である。その意味で、料理も一種の創作であり、その料理人が替われば、その料理も変わる。(96字)

### 【文章2】

食器は料理への食欲を左右するため重要である。そのことは料理にこだわる人ほどうるさいものとなるが、現代の料理家は食器に気に掛けることがない。食器の重要性が分かると、器を含めた料理を考えるため見識が広くなる。また、よい食器のある時代はよい料理のあった時代といえる。さらに食器を見ればその料理の内容までほぼ推察がつく。このような食器と料理のむすびつきについて今日の料理家には意を用いてほしい。(193字)

カレーを新聞紙に盛れば悪寒がする。一方美しい皿に盛れば喜んで食べる。このように食器は料理に重要である。現代の料理家は食器に気に掛けることがない。食器の重要性が分かると、器を含めた料理を考えるため見識が広くなる。また、よい食器のある時代はよい料理のあった時代といえる。さらに食器を見ればその料理の内容までほぼ推察がつく。このような食器と料理のむすびつきについて今日の料理家には意を用いてほしい。(196字)

### 【文章3】

昔日本に行われていたことが、昔行われていたために、日本本来のものだということとは成立しない。むしろ、日本の文化や伝統の独自性を生むものは日本人自体の必要とそれに応じた欲求である。そのため、外国人は日本を外から見て発見し説明づけなければならなかったが、我々日本人は日本を見失うことはない。だから、日本の古代文化を知らない「僕」でも自身の日本文化の見方を語ってみようと思う。